論　文

金素雲の民謡蒐集・日訳結実の過程を追う
―『朝鮮民謡集』『諺文 朝鮮口伝民謡集』『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』を中心に―

中　井　裕　子

はじめに

金素雲（1908 ～ 1981）は、生涯に亘り文筆家として日本と朝鮮半島の相互の文化理解に努めた人物である。とりわけ翻訳家として活躍した金素雲（以後、素雲と略称）が最初に翻訳を試みたのは朝鮮民謡であった。

素雲の民謡蒐集の動機についての先行研究は、比較文学の視点からの上垣外憲一「土田杏村から見るデビュー時代の素雲」[1] がある。上垣外は、雑誌『地上楽園』『東洋』『民族芸術』、などによって「日本知識人の民謡への関心が最高潮に達した」「昭和元年～二年当時の民謡ブーム、それに乗じて『朝鮮民謡の研究』の出版といった総合的な朝鮮民謡の紹介の本さえ日本で出版されるという状況、これらが素雲の朝鮮民謡採集の動機だった」[2] と分析する。氏は別に「白鳥省吾『地上楽園』と素雲『朝鮮の農民歌謡』」[3] において、素雲の投稿の経緯と彼の最初の業績の発掘者としての白鳥省吾の再評価も試みている。

一方、民俗学の方面からは、茶谷十六、任東権、森山弘毅の論がある[4]。中でも長年日本民謡を蒐集継承してきた劇団「わらび座」創立者で郷土史家の茶谷は、素雲の翻訳の業績があってこそ日韓の民謡の共通点と相違点が明確にでき、民謡音楽、民舞なども含めた日韓の比較民謡学が構想できると評価した。茶谷は現在우리소리博物館館長李相一[5] らと民・童謡の対訳化に向けて構想している。

500 部限定印刷だった『諺文 朝鮮口伝民謡集』（以後『口伝民謡集』と略記）については、『素雲の韓国口伝童謡』と『素雲の韓国口伝民謡』[6] が没後に刊行されたこともあり、韓国での研究論文も多いが、とりわけパク・チヨン[7] とチョン・ゲヨン[8] の研究が重要である。パクは、メロディーや動作を伴う朝鮮伝来童謡を日本語に翻訳することの不可能さを論じた。また、チョンは朝鮮総督府の事実上の朝鮮語機関紙『毎日申報』紙上で素雲が募集した民謡と『口伝民謡集』所収民謡の比較検討をし、素雲が『毎日申報』の投稿を地名や名前も含めほぼ忠実に所収していることを証明した。

権保慶[9]は、崔南善の素雲への影響の大きさを論じるとともに、戦前戦後での翻訳手法の変化を分析した。また、素雲研究家村上芙佐子[10]は『口伝民謡集』出版に至る時代背景と過程を明らかにした。

本稿では、これらの研究成果を踏まえ、二つの目的を持って考察する。まず、素雲にとって朝鮮民謡・童謡にどのような意味があり、なぜ収集し日訳にまで挑んだのかの動機を探る。そのために自伝『天の涯に生くるとも』[11]（以後『天の涯』と略記）を参考に、素雲の二重言語獲得の過程、渡日後の日本生活適応の方法などから掘り起こす。

次に、素雲が日本でどのような文人たちとどのような活動をして十代を過ごしたかにも注目し、雑誌『地上楽園』への投稿を契機に、『朝鮮民謡集』（泰文館）、『諺文 朝鮮口伝民謡集』（第一書房）、『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』（岩波文庫）の四冊の出版が、宗主国日本の文壇と出版社のどのような植民地文化理解の下に行われたか、またその限界は何だったかを探る。

大正デモクラシーから全体主義へと激動する時代背景も視野に入れつつ、その時期に岩波文庫『朝鮮民謡選』『朝鮮童謡選』というロングセラーが誕生した過程から当時の出版界の一面を垣間見る。（以後、引用文の傍点は筆者による。）

Ⅰ．民謡蒐集の動機と日訳の契機

まず、『天の涯』から素雲の略歴を紹介する。素雲は釜山の絶影島（牧の島）に旧韓国度支部の少壮官吏の父（金玉顕）、母（朴徳水）の間に長男として生まれた[12]。翌年、父は慶尚南道の晋州で同胞の銃弾に斃れる。この一族の不幸は、父方の祖父金致夢の土地喪失、母のロシア出奔と連鎖し、素雲は12歳で親族のいる大阪をめざして渡航する。

その後、関西の在日朝鮮人社会のありように幻滅して脱出し、翌年２月、何度か投稿した児童雑誌出版社の職業斡旋広告を見て上京する。しかし、その広告は虚偽であった。無一文の素雲は下町の人情と新聞売りや肉体労働による日銭稼ぎで命を繋いだ。その天涯孤独の辛い他郷暮しを支えたのが、同胞労働者からの民謡蒐集だった。

当時、日本の民俗学の帝国的視点は、琉球やアイヌ民族、海外の先住民や植民地人にも向けられ、朝鮮半島の民俗調査も多様になされ、明治末には民謡や民譚の翻訳も始まっていた[13]。

例えば、1927年刊市山盛雄編『朝鮮民謡の研究』[14]は、執筆陣に近代朝鮮文学の開拓者と言える崔南善や李光洙、時調詩人の李殷相も参加した多面的な評論集である。この著書の巻末の『朝鮮歌謡叢書』の宣伝文には、「如何に民族が日暮

しの刹那的享楽性を帯び厭世的で逃避的であの赤肌山のうちつづく寂しき国の詩人の群れ」が歌い継いだかという民謡観と、「この民衆芸術の世界を通して内鮮人の親和融合境にいたる」目的が綴られる。（以後引用文中の傍点は筆者による）

のちに川村湊によって「大東亜民俗学」[15]と批判される典型的な帝国的蒐集目的を顕わにしたこの著書の中で、朝鮮側の碩学崔南善、近代小説の先駆者李光洙、時調詩人李殷相は、それぞれ冷静に反駁している。例えば、崔南善は「朝鮮民謡の概観」と題して『三国史記』『三国遺事』を引用しながら民謡・童謡のルーツが遥か高句麗や新羅の郷歌などにあることを論じた。李光洙は、朝鮮人の残忍性を否定し、李殷相は青孀民謡（寡婦の嘆歌）を詳細に分析し、民族の誇りと抵抗意識を示した。

素雲は、その崔南善の論文の一部を、「碩学崔南善氏はかつて某紙に寄せて、『民謡は朝鮮民衆文学の最大分野であり、朝鮮は民謡を通じての文学国である』と論ぜられた。」[16]と引用している。素雲にとって崔南善の民謡観の影響が大きいことが伺える。

村上芙佐子作成年表によると、1924年「この年創刊した『時代日報』（社長崔南善、主筆秦学文）に『帝国通信』の祝辞を伝達。その縁で同紙に習作詩「秋」「信條」などを発表。」とある。筆者の調査で、この二作の習作詩を含め1925年11月から1926年にかけて21作の短詩を投稿していることが分かった。このことから、17から18歳の素雲にとって「碩学崔南善」は憧憬の対象であり、彼の歴史観、教育観も早くから素雲に大きな影響を与えたと推測している[17]。

民謡は「そのまゝ主食であり、心情の飢渇を救ふ活泉」[18]であるとする崔南善の言葉は、素雲の漂泊人生の実感でもあった。崔南善は上記の論文の末尾を、朝鮮民謡の収集と研究が焦眉だと結んでいる。素雲は、崔南善の使命感と危機意識に共感し、本格的蒐集の先鋒の役割を果すために奮起して走り出した。筆者は蒐集の動機をこのように推測する。

Ⅱ．白鳥省吾[19]主宰『地上楽園』[20]への投稿

素雲が本名の金教煥名で雑誌『地上楽園』に「朝鮮の農民歌謡」と題して５回連載したのは、1927年１月からの半年である。この連載で、「思親歌」・「新二八青春歌」・「リユクチヤペギ」[21]・「アララング」[22]・「ヂヨンジ歌」・「農夫歌」・「煙草の歌」・「童謡」・「子守歌」・「婦謡」・「麦打ち唄」の日訳を紹介した。また、「所感」「ラインの情緒」「与謝野鉄幹の『韓謡十種』」「雑誌『真人』について一言」などの論評も含んだ。これらの論評には、日本人の朝鮮文化に対する無理解、偏見への抗議も含まれていた。例えば、連載一回目の「所感」には、『地上楽園』の新詩欄の「朝鮮半島と私」という一編を読んで「生命の流動鈍き未開の半島」

という表現に出会い、笑って済ませられないものを感じたと書く。以下に、「所感」の一部を引く。（筆者が現在仮名遣いに修正）

> 神功皇后や加藤清正に征伐された朝鮮を知らないものは、尋常一年生にもあるまいが、五百年の昔日、日本の文化を指導した先進国としての朝鮮を記憶する者が幾人いよう。（略）芸術のない国だなどと乱暴な口をきかれるのは心外である。謂っちゃ悪いが、日本人はうぬぼれが早過ぎる、僕等の見る所、決して賢明ではないようだ、もっと朝鮮を理解してもいいだろう。今日までのように悪ごすく光らした眼ざしでなしに、真の意味に於ける誤りない理解をもってくれるも良いと思う[23]。

素雲は、日本社会で育つ中で「悪ごすく光らした眼ざし」を日々感じていた。日本人の無知、傲慢、狡猾、自惚れ、誤解などの差別意識を、歯に衣着せず指摘している。そうして「理窟を抜いた真率さで、朝鮮農民の民謡を見て頂きたいと思う」と前置きして、いくつかの民謡を紹介したのち、アリランの中に渡日労働者などが唄ったのを見つけたとして13首を紹介する。そのうち４首を以下に示す。

> 鬼の東拓[24]呪わにゃ置かぬ／畑とられてまた別れ // 遠い北海道で山掘らすのも／憎い東拓さしたこと
> どうせ取れても食われぬ米よ／まゝよ旱で稲枯らせ // 運んで置いて返しちゃ呉れぬ／連絡船は地獄船[25]

「アラランゲ」はもともと集団的、即興的に歌いつなぐ民謡なので、そこに集った人の思いが共感される。蒐集の現場は不明だが、「渡日労働者」集団の憎悪、恨み、自棄、直截な批判、その反面の矜持などを、素雲は七七七五の日本の民謡のリズムに合わせて明確に訳した。出版警察の検閲も始まっていた時期、雑誌に迷惑をかけるかもしれなかったが、「先生（筆者注：白鳥省吾）のお言葉でもあったので、思い切ってこの大胆をなした」と書いている。この助言には「芸術の社会化、社会の芸術化」を目指す白鳥の断固とした姿勢が垣間見られる。

上垣内憲一は、前掲論文の中で「素雲は民謡に分け入るその直前の一時期に、関西に栄えた『阪神間モダニズム』[26]の息吹に浸っていたこともあ」り、「百田宗治からは詩集の序文までもらったが、その出版は校正刷りがでたままで、またもや流産してしまった」[27]という因縁があるとする。上垣内は、その百田が素雲を白鳥省吾の『地上楽園』に繋いだと考えている。

以後、『地上楽園』の投稿は半年に渡って５回続くが、その間になされた『地

上楽園』第一回小集記[28]を同人の楜沢龍吉が記録している。それによると、素雲が「他の詩誌に見られぬ吾が『地上楽園』唯一の花形」として迎えられたことがわかる。朝鮮問題になって素雲は興奮し、中村恭二郎が50年後の植民地解放を予測すると、素雲は「五百年も千年も続く」と悲観的に語り、「が、奈何なる形式にもしろ、朝鮮人をして朝鮮人たらしめよ。美しい朝鮮語まで無理に奪って日本人化できるものでない。英国に対する愛蘭の問題と同じだ。我々は、愛蘭文学を思うにつけ、総てはそこ力のある朝鮮文学の勃興をするだろうことを予期する」と放言したという。

素雲は「美しい朝鮮語を無理に奪」おうとする帝国の横暴に対抗すべく、愛蘭文学復興運動[29]に範を得て「そこ力のある朝鮮文学の勃興」を期していたことがわかる。

Ⅲ．北原白秋の尽力での初出版『朝鮮民謡集』

1．出版を支えた人々

その後、素雲は発表の場を『東洋』『民俗芸術』などの雑誌に代えて評論、翻訳活動を続けるが、このような活動の蓄積が1929年7月『朝鮮民謡集』（泰文館）として結実するには、北原白秋との出会いがあった。「常日ごろ日本内地の人々の朝鮮文化に対する早呑込みと専断癖にいさゝかの不満があった矢先でもあり、自分のさゝやかな技能が民族本来の精神を伝へ示す一助ともならばと、その後も心がけて翻訳をつゞけてゐるうち、いつか一冊の書物とする分量が出来た」。その原稿を思い切って北原白秋に見せたのだ。すると白秋は「これは立派だ、すばらしいものが朝鮮にはあるね」と言って、序文まで書いてくれたという。素雲は『朝鮮民謡選』覚書で「その頃私は蛇窪の陽の射さぬ陋屋で失意と貧苦にまみれた味気ない日を送ってゐたので、（略）北原先生のこの温情は新たな生甲斐とさへなった。（略）あの夜の感激は終生私の脳裏を離れ去るものではない」[30]と深い感謝の念を記している。

2．白秋の評価と文人たちの支援

白秋は『朝鮮民謡集』の冒頭に「序」を提供した。長文であるため、その要点を三点挙げる。

第一に、「朝鮮のことを単に韓と呼」ぶほどの白秋の親近感である。「私なぞは古代日本と朝鮮、支那、南洋、或は阿蘭陀文化の雑種のようなものである」という自己認識が、朝鮮文化への無知・偏見から白秋を開放していた。彼は酒屋の長男であったが、詩を志して東京に出て出版した詩集『邪宗門』にも、韓の文化が

しみ込んだ筑後柳川の風土や伝説、言語をそのまま溶け込ませることで評価を得た詩人であり、朝鮮民謡の価値を十分理解できた。

第二に、素雲の翻訳への過度な賞賛である。白秋は、朝鮮民族とは「第一に国民性、第二に言語の懸隔が甚しい」にも関わらず、「日本の歌謡調に翻訳することの難事」を「金君は易々と仕上げている。あまりにも日本化されたほど、日本の語韻、野趣といふものをその詩技の上に渾融せしめてゐる。時には小面憎くさえ感ぜしめる『持ち味』の中にまで浸透して来るものがある。」と、高く評価している。それでも「小面憎く感ぜしめ」たのは、素雲の朝鮮文学復興の意志を感じた宗主国人の直感かもしれない。

第三に、白秋が朝鮮民謡の神髄をよく把握している点である。日本の民謡・童謡研究も行っていた白秋は、素雲の翻訳によって、「朝鮮の民謡は国情国性の然らしむる幾多の理由に於て、日本のそれらより以上の辛辣な皮肉と譏笑とに恵まれている、悲痛味も多い。」と分析することができた。

白秋は「この親しい韓の国の青年」のために自費で、「素雲を紹介する夕」を催しさえした。東京神田名月館で行われたこの催しには、孫晋泰、萩原朔太郎、室生犀星、福士幸次郎、山田耕作、山本鼎、折口信夫ら、各方面の元老人士20余名が出席した。

このような文壇有志の支援のもと、『朝鮮民謡集』は1929年7月に世に出た[31]。装丁は、これが最後の作品となった岸田劉生と岩波書店『夏目漱石全集』の装丁も手掛けた木版彫刻師伊上凡骨が引き受けた。劉生の交友が、志賀直哉や武者小路実篤らの「白樺」派、北原白秋などの「パンの会」など広かったからではないかと考える。

劉生は、雑誌『白樺』の装丁にも関わっていた。白樺派に属した柳宗悦とも親しく、彼の開催する朝鮮民族美術展[32]にも行った。その日の日記に「見るとなかなか美くしいのに驚いた。筆立てや壺や箱に実に美くしいのがある。民間画工のかいた変な鳥や虎などの画もへんに美しい。（略）民族美術というものの味について考えたりした。」[33]とある。「民画」を含めて朝鮮民族美術に理解を深めた劉生が装丁に協力したのも頷かれる。

3．民謡分類の特徴

『朝鮮民謡集』の民謡分類は目次と解説で以下のように示されている。（〔〕中の編数のカウントは筆者による）

民謡篇（一）～最も純粋なる口伝民謡中、田植唄、チョングジ（草取歌）ユクチャパギ（六字伯）アリラング（亜里欄）等　〔43編〕

民謡編（二）～短き謡句にて一首をなせる短章を分け撰びて「民謡篇（二）」をつくれるも、種類、情緒を通じては（一）に異なることなし。〔40編〕

民謡編（三）～本質に稍遠きものを集めて「民謡（三）」となせり。〔17編〕[34]

童謡篇～児童謡の重なるものより純情謡、遊戯謡、諧謔謡を選びて「童謡編」を編めり。資料は多く彰文社版「朝鮮童謡集」[35]に求めたれど畏友孫晋泰氏並びに郷里の安昌海君に負ふ所尠らず。〔35編と雑謡27編〕

婦謡編～専ら婦女に歌はるるものを括りて「婦謡編」とせり。労作謡、純情謡、母謡等の他、童謡に属すべきもの二三あれど、細別の煩を避け凡て一つに加へ置けり。〔22編〕

朝鮮民謡に就いて～「領域」「歌はれざる民謡」「『線』の情緒」「アリランの律調」「童謡について」「婦謡」「チョンジとユクチヤバグ」「韓国の謡」その他

以上、同書には計184編の民・童謡と「民俗芸術」や「東洋」などに素雲が書いた民謡論が収められているが、興味深いのは、分類方法である。民謡篇（一）と（二）が「最も純粋」な労作歌で、（三）は「本質に稍遠きもの」として、新しい歌や儒教の影響を受けているものを上げており、昔から歌い継がれてきた労作謡の純粋性を重んじるという民謡観が伺える。

「童謡篇」「婦謡編」は誰が歌うかで分類しており、のちに岩波文庫『朝鮮童謡選』に民謡とは分けて収録される。素雲が早くから子供や女性に視線を向けていたことがわかる。

また、巻末の「朝鮮民謡に就いて」では、今まで素雲が各種雑誌や新聞に投稿した論考を再掲した。その中で、各地の四種の「アリラン」の楽譜も掲載したり、ローマ字で原歌の発音を再現したりして、翻訳によって失われた韻律性を補おうとした。

4．中村恭二郎の跋

中村恭二郎は本書の末尾に「朝鮮民謡集の後に」と題する跋文を提供した。中村は元『地上楽園』同人で、拘束された素雲の出獄を支援したり、小川静子との結婚式を取り仕切ったりするなど、素雲の真意を最も深く理解した人物である。素雲は、その中村に跋を依頼する手紙を送った。その中で素雲は「これは民謡集でなしに、僕の碑銘です……」と喩えるほど出版への覚悟を語っている。それに応えて、中村は「これだけの立派な仕事をした人が―小生には、あたかも愛蘭土

文芸復興運動により伴った努力と、輝かしい成功とを想起させるのですが―まだ二十五になるかならぬ、異国の青年であることを知つた読者は驚かれることだらうと思ひます」と書き、二人は朝鮮問題について熱心な談話を交わし、その中で「その独自な文化の紹介と、発達への寄与」を互いに期したする。そして、彼の志が「狭い日本詩壇にはなくて、世界の人々の心に呼びかけてゐる」ことを知ってほしいと述べ、「日本語に於てさへ、かくも流麗に生かされた此翻訳が、もし欧米諸国に通ずる広い言葉でなされるなら、確かに東洋に於ける此の愛蘭土の、文芸復興の先駆として、世界の視聴を集めるに足りることでありませう。」と締めくくっている。中村は、大英帝国に植民地化させられるアイルランド人たちの文芸復興運動が世界に影響を与えたように、「東洋に於ける此の愛蘭土」即ち朝鮮の文芸復興を素雲が目指していると訴えている。

中村は、素雲に「祖国の為に殉じ様とする志士」の生きざまを見たとし、素雲の「唯一の望みが愛する祖国の文化を伝ふべき此書の出版に懸つてゐた」と出版の実現に涙している。彼は素雲との出会いと交流を通して、自らの視座をインペリアルで冷酷な視線から朝鮮文化への尊敬のまなざしへと転換できた人物の一人であった。

5．素雲の翻訳の特徴

では、白秋が称賛した「時には小面憎くさえ感ぜしめる『持ち味』」とはどのようなものか、素雲が翻訳した朝鮮民謡を三例示す。

ⅰ.「田植唄」

春が来ました７　／燕に　ついて７、／しろが　忙(せは)しや７　／苗代(なはしろ)が―５。//
植ゑろ　植ゑろよ７　／水田にや　苗を、７　／親の墓所(はかしょ)にや７　／松の木を―　７。// 揃ろて　ならべりや７　／三日月さまよ、７　／なんの　三日月や７　／空にある５　//
植ゑた　植ゑたよ７　／のこらず　植ゑた７　／広い水田が７／青々(あおあお)と―５。//
揃ろた植子も７　／日暮れにや　かへる７　／あすの朝来りや７／また　逢ほぜ５。

ⅱ.「田草」

見やれ　向うの７　／カルミヶ峰に７　／雲が湧いたよ７　／雨雲が―５。//
雨が降るなら７　／蓑笠　つけて７　／田草取りなと７　／始めよか。５

ⅲ.「娘おばこは」

朝露(さづゆ)　消えぬに７　／夜明けの畑(はた)で、７／どこの娘が７／桑を摘(つ)む。５//
娘　おばこは７　／見るほど可愛い、７／わしと　偕老(かいろう)７／契(ちぎ)らぬか５。

朝鮮民族も日本民族も農耕社会の伝統が長い。そのため農作業歌も似たものが発展した。ⅰは、苗代作りから田植えの作業時に歌う歌で、農村共同体の共同作業を円滑に進める役割をする。ⅱも収穫を左右する雑草を取るという根気と体力を必要とする作業の苦痛を和らげ、共同体意識を高めるための歌だが、「カルミヶ峰」という固有名詞さえ無ければ日本民謡と紛うほどの翻訳である。ⅲは桑を摘む娘への若者の求婚歌で、日本でも古代の「歌垣」以来「相聞歌」形式は多様な発展をしてきた。ⅲでは、秋田方言で「娘」を意味する「おばこ」を用いるなど、素雲の方言語彙も多いことがわかる。地方民謡が注目された背景の一つとして、文部省が収集発行した『俚謡集』[36]の影響や労働から切り離された民謡や創作民謡の普及があったと思われる。

白秋の感じた「時には小面憎くさえ感ぜしめる『持ち味』」とは、このような近世に定着した日本民謡の七七七五音のリズムに朝鮮語の歌詞を当てはめた日本民謡の勘所を掴んだ訳であった。また、この時期はちょうど日本内外の民謡が脚光を浴び始めた時期で、ちょうど時宜を得て受容されやすかったと考える。

Ⅳ．第一書房『諺文 朝鮮口伝民謡集』[37]への道のり

1．土田杏村[38]との出会い

土田杏村研究家の上木敏郎は、民謡による素雲と土田杏村との縁、小倉進平[39]と土田杏村の論争の存在を明らかにした[40]。上木によると、杏村は「上田自由大学」で哲学を講義するなど学問の中央集権に抗する哲学者であったが、1923年以来、咽頭結核のため寝付くことが多くなった。彼の『国文学の哲学的研究』全四巻も、病床の読書が本格的な研究に進んだものという。中でも杏村が力を入れたのは「上代の歌謡」に関する研究であり、当時まだよく解明されていなかった万葉集中の「志良宜歌（しらげうた）」を本居宣長のいう「尻上げ歌」ではなく、新羅伝来の歌であると断じた。以下、上木敏郎の文から引用する。

> 杏村の研究は上田万年などの注目を惹き、吉沢義則、新村出両教授の熱心なすすめにより、昭和四年（1929）、杏村は「上代の歌謡」を主論文として京大文学部に学位申請の書類を提出した。その後の経緯については詳述しないが、一部からの強硬意見と複雑な学内事情とから杏村の論文は長く放置されたままで審査の運びにすら至らなかった。杏村は論文を取り戻したあと、日記に「京大アカデミズム」の愚を笑う文章を執筆している[41]。

上木の調査によると、「一部からの強硬意見」とは和辻哲郎、小倉進平らという。

神功皇后新羅征伐に始まる朝鮮半島支配正当化の国策を逆転させる杏村の新説への警戒が、「京大アカデミズム」の中にあったことがわかる。では「複雑な学内事情」とは何か。例えば、1925年12月には京都帝国大学や同志社大学などでマルクス主義の研究サークルが弾圧・粛清された京都学連事件。この事件では、日本内地で初めて治安維持法が適用された。1928年マルクス経済学者川上肇京大教授の辞職に続く1929年３月の山本宣治の暗殺と同時期である。山本は自由大学の講師も務め、1924年３月より京都自由大学の初代校長となり、1925年に労農党衆議院議員になっていた。このような大正デモクラシーから全体主義への大きな時代の変化の時期でもあった。

土田杏村の画期的な学位論文はこのような時代背景のもと放置された。杏村の学位論文不受理は、1933年の滝川事件前夜の京都帝大アカデミズム凋落実態を象徴的に示す出来事であった。

素雲の「杏村先生の思い出」によると、土田杏村はこの学位論文を書くにあたり、素雲の朝鮮民謡の記事[42]を読んで数回手紙を寄越し、素雲は具体例をあげて返信したという[43]。その後、土田杏村は素雲の論文も引用しつつ論文を執筆し、単行本『上代の文学』として第一書房から出版した。

素雲が「文中、私の名も、ところどころ引き合いに出されていた」というのは、「その系統にも鮮明な区別が挙げられる。即ち、蒙古、女真、新羅の三系統がそれで、就中純粋な新羅の流れに由る南朝鮮一円の民謡であろう。」[44]という箇所である。

素雲の「純粋な新羅の流れに由る南朝鮮一円の民謡」は崔南善の論だが、杏村も、南朝鮮一円には新羅歌謡の系統が引き継がれていると考え、さらにそれが日本に流入したものが「志良宜歌」だと考えたのである。

２．小倉・土田論争の経緯

土田杏村は素雲の手助けも受けて執筆した『上代の歌謡』で得た確信を、新羅郷歌研究の一人者で1926年から京城帝国大学教授に就任していた小倉進平に論争として挑んだ[45]。自分の学位論文に強硬意見を出した一人が小倉であったことを土田は知ってか知らずか、土田の意気軒昂な表現も加わるこの論争は、雑誌「国語国文の研究」（京都　文献書院）誌上で1929年12月から1930年５月まで６回に亘って展開された。杏村は「記紀歌謡に於ける新羅系歌形」について４回小倉進平に質し、それに対し小倉は２回応えている。素雲は「杏村先生の思い出」で「氏（小倉）は朝鮮の古代歌謡である『郷歌（ヒャンガ）』の研究で学位をとった人で、（略）『郷歌』に関する膨大な著述もあり、その方面にかけては第一人者といわれた人である。その小倉氏を相手に土田先生が朝鮮の歌謡形態についてチョウチョウ発止と渡り合われたのは、よほどの自信がなくては叶わぬこと」と感嘆している[46]。

土田は「上代の歌謡」で、『三国遺事』『均如傳』所収の25首の郷歌の音数律を数えて平均化し、ほぼ『四四節』の結果を導いていたので、それを小倉に提起した。一方、小倉進平は郷歌の研究一人者の知識を援用して「八八節」を唱える。それに対して杏村は疑義を唱え、最後は25首の音数表を示せと言う土田の要求に応えない小倉に対し「小倉氏が最後までこの表の提示を拒まれたことは、何としても氏の論に致命的の欠陥であり、結局氏は今後千万言を費やされたとしても、その論に何の権威をも与へることが出来ないであらう。」と述べ、「私の自信は動かない。（略）東方亜細亜の面積はひろい。ここで徒らに時間を費して居れば、やがて日暮れて途遠しの嘆を発しなければなるまい。その方が私には致命的の打撃なのだ。」[47]と論争を結んでいる。

このように新進気鋭の郷歌学者の小倉にでも対抗する杏村の学問への情熱は、素雲に大きな影響を与えた。特に新羅系統の民謡が全羅道の民謡に残り、それが日本の上代歌謡と関っていることに確信を深めた素雲は、本格的な民謡蒐集を思い立ってソウルに戻る。そして２年間『毎日申報』児童欄に「千一夜奇譚」の翻訳を連載しつつ、公募して朝鮮全道から民・童謡約二千余首を蒐集した。京城で出版できる会社を探したが断られ、その原稿をミカン箱三つほどに詰め込んで再び東京に戻る。そして、東洋文庫、学士院などを訪ねたが出版を断られ、再び「一縷の望みも消えはてて、（略）またぞろ『両極分立』[48]の危っかしい綱渡り」をしていたところ、土田杏村から再び手紙が来る。

今回は、諺文の稿本の一部を見せてはもらえまいかという文面だった。そこで分冊稿本の一つを送ったところ、「京都まで出向いてもらえたら好都合だが―」という手紙が来たので、旅費を工面して京都へ立った[49]。

杏村の部屋に一歩足を踏み入れた素雲は、肺患の長期療養をしている杏村の「曇りのない炯炯たる眼光」に打たれたという。当時杏村は矢継ぎ早に第一書房から書物を出していたので、どうしてそんな力が出るのかと素雲が聞くと、杏村は「よくそんなことを人に聞かれるのですが、私は自分を病人だなどとは考えていません。私に許された健康の限界がここまでだと、そうとっているのです。七度五分の微熱―、これがいわば私の平熱なんですよ。」答えたという。この平熱説は、素雲にとって自らを鞭打ち、人を励ます「処方箋」になった。

３．新村出との出逢い

次は、杏村の近所に住んでいた京都帝大文学部教授新村出との出会いである。

新村出は、前述の『朝鮮民謡集』出版記念会に「朝鮮文化に一歩近づいたことを嬉しく思います」という祝電を送るほど朝鮮文化に理解を示していた[50]。

素雲の記憶は曖昧だが、「杏村先生がお近くの新村先生をお招きした[51]のは、

私の口伝民謡の出版の件で御意見を交わされるためではなかったろうか。」と推測している。素雲は当時京都帝大図書館長であった新村に請われて京都第三高校で講演までしたという[52]。新村恭によると新村は実父関口隆吉の漢学重視の考えから新制度の小学校未就学である[53]。学歴なく自らの努力のみで日本語を獲得した素雲への惜しみない支援の根底には、このような共感もあっただろう。

では、新村出は土田杏村や素雲とどんな意見を交わしたのだろうか。

新村出は杏村が学位申請した論文「上代の歌謡」の推薦者であり、それが放置されていることに心を痛めていただろう。『朝鮮民謡集』の訳者素雲の原資料を見て諺文にも関心を示し、日本の古代歌謡への影響を認めたのではないか。新村には東京帝大講師時代の教え子として、アイヌ語研究の金田一京助、おもろ草紙研究の伊波普猷、朝鮮語研究の小倉進平がいた[54]。自らもキリシタン文献の研究に励む言語学者新村は、諺文資料の貴重さを誰よりも認識し、論争する小倉・土田の両弟子に対し、原資料『諺文 朝鮮口伝民謡集』第一書房出版という形で応えた。彼はまた、1934年の杏村の死後、編纂顧問の一人として第一書房『土田杏村全集』全15巻の出版を実現させ、論文「上代の歌謡」は第11巻「国文学研究」に収録されている。

因みに『広辞苑』第7版の「志良宜歌」の新村の解説は、「しらげ‐うた【後挙歌・志良宜歌】（シリアゲウタ（尻上歌）の約という。一説、シラギ（新羅）ウタの転）上代の歌謡で、末節を高く挙げて歌う歌。古事記下『此は―なり』」である。

4．第一書房との因縁

では、第一書房社長長谷川巳之吉はこの出版をなぜ敢行したのか。長谷川の出版方針は従来「自分の勉強の資料になる本か、または芸術的趣楽になる本か」だった。しかし、「編纂者素雲君の苦心談に非常に感激して仕舞って、遂に亡びゆく過去の朝鮮民謡の為めに一肌ぬいで此の菊判七百頁の本を五百部だけ印刷したのだ。僕らの仕事は良い仕事の為めに一肌脱ぐという意気を失っては意味ないと思っている」と語っている[55]。

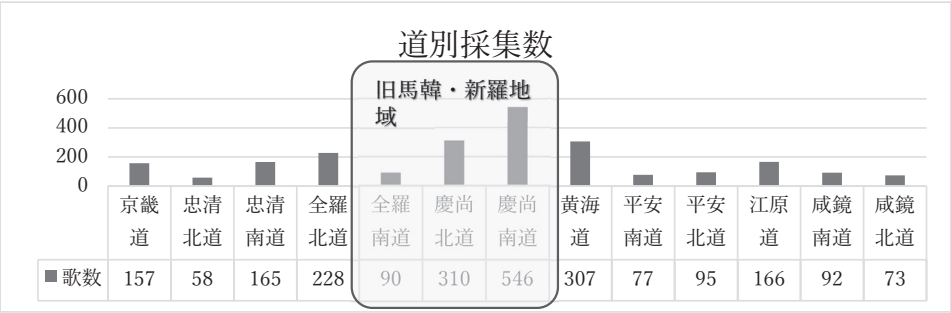
当代の出版人長谷川でも、朝鮮民謡は「滅びゆく過去の」ものという認識であったことがわかるが、それでも「良い仕事の為めに一肌脱ぐという意気」で菊判700頁に天金洋装の豪華大刷として世に出し、素雲には五十円の手当てを与えた。この本の序の最後に素雲は「この本は長谷川第一書房主の侠援による犠牲出版だ。土田杏村氏の尽力と畏友田中初夫、孫晋泰両氏の資料に関する助力を感謝しないではいられない。（筆者訳）」[56]という謝辞を述べると共に、蒐集に貢献した「２百名の共助者の限りない努力」を特筆している。

5.『諺文 朝鮮口伝民謡集』の採集・採録の特徴

素雲は『京城日報』に寄せた自作紹介で、「ここには純粋な口伝民謡二千三百あまりが方言の儘の飾らぬ姿で蒐録されている現に歌われ或は埋もれ隠れた素材を地方別（府郡単位）に括って一つに積み上げたまでで、整静斎たる体系を成したものではない。量的にも充分な収穫とは言えないかも知れぬ」と自覚している。しかし、この原石が「篤実な研究家の手によって可能な最大範囲まで利用されてくれるであろう。幾千年に亘る民族の情緒の蓄積、それが新らしい衣をつけて再び蘇る日をひそかに楽しみに待ち望みたい。」[57] と結んでいる。

その蒐集数を〔表１〕で示すが、素雲は崔南善の大別－「雄渾にして威圧的な『嶺南』風（慶尚）、柔和にして余裕ある『湖南』風（全羅）、清和閑雅宮廷的気分の漲れる京城風、促迫哀楚傷心の声ならざるなき『西道』（平安・黄海）」[58]―を意識し、朝鮮全域を網羅する意図を持っていたと考える。加えて、〔表１〕で明らかなように杏村が日本の古代歌謡への影響を仮定した旧馬韓・新羅地域（慶尚北・南道）の民謡がほぼ６割を占めている。この収集は崔南善が望む「蒐集の第一期」の役割を果たそうとしたもので、朝鮮人の手で出版されるきものと考え「及ぶ限りの努力は尽したつもりであるが能わなかった」ため、日本人の手でなされた。

〔表１〕『諺文 朝鮮口伝民謡集』掲載の道別の歌数を数えて筆者がグラフ化したもの



	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道	黄海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道
■歌数	157	58	165	228	90	310	546	307	77	95	166	92	73

素雲は、当時唯一諺文活字を持つ横浜の印刷屋で何度も組み直しをして印刷原稿を完成させた。その「素材」の一例を以下に示すが、方言の発音そのまま当時の綴字法で活字化されている。囃子言葉に労働のリズムと気合を込めて農作業の労苦を支え合う農民の姿が浮かび上がる。（　）内は筆者試訳。

慶尚北道　栄州　農謡一篇　〔八三七〕　＊農軍들이논매며（農軍たちが草取りしながら）

시내갱빈에　돌도만타　／　쾌장아 칭치 나 - 네（河のほとりには石も多い　／

大丈夫　チンチ　ナーネ）
칭천하늘에　별도만타　／　쾌장아 칭치 나 - 네（晴天の空には星も多い　／大丈夫　チンチ　ナーネ）
창락들에　보리도만타　／　쾌장아 칭치 나 - 네（昌楽の野には麦も多い　／大丈夫　チンチ　ナーネ）

Ⅴ．岩波文庫『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』の公刊へ

1．岩波茂雄との縁

1933 年 1 月 15 日、『朝鮮童謡選』[59]（以後『童謡選』）が岩波文庫から出版された。続けて姉妹編として同年８月５日、『朝鮮民謡選』[60]（以後『民謡選』）が出版される。この相次ぐ岩波書店の協力には、当時の社長岩波茂雄[61]の尽力があった。

素雲は『天の涯』で、「岩波書店」という項を立て、「その日を私は忘れられない」と書き出し、茂雄と出会った日からの逸話を語っている。曰く、持ち込める出版社を求めて日訳原稿の包みを抱えて天啓のような考えが浮かんで岩波書店に向い岩波茂雄に出会ったこと、原稿を預けて二回目に文庫本に入れたいとの返事を貰ったこと、いつも君付けで呼んで玄関まで送ってくれたこと、京城で素雲の子が死んだ時長い手紙をくれたこと、岩波茂雄が亡くなってからも鎌倉の墓所を時々訪ねていったことなど。素雲は岩波を「民族と民族との距離を越えて、私の行く手に灯を照らしてくれ、人格の真実の意味を私に教えてくれた、人生行路の師表」と感謝の念を表している[62]。

この二冊の文庫は、最初の翻訳書『朝鮮民謡集』とその原石『口伝民謡集』などから素雲が分類して翻訳したもので、岩波文庫の中でも数少ない朝鮮文学の一冊としてロングセラーを重ねた。

2．『童謡選』『民謡選』の分類方法

ⅰ．『童謡選』の構成と分類の特徴

「序に代へて―朝鮮の児童たちに―」では、素雲が朝鮮の児童たちとともに「伝統の子」であるとの一体感を表明している。「飽まで温雅な性情」と「自然児の溌剌たる魂」の籠ったいくつかの童謡を紹介しつつ、「文化の精神の上で迷児となるな。畸形児と呼ばれるな。」と激励している。この文を「東中野のアパートの夜更け、私は涙ぐみながらこの自序を草した。」と『朝鮮童謡選』戦後版あとがきに記し、郷土への変わらぬ「思慕と祈り」を表している。

次に、目次から分類を見ると（〔〕内数字は筆者）、天体･気象〔５〕、鳥の謡〔13〕、

魚や虫の謡〔15〕、植物の謡〔９〕、父母・兄弟〔14〕、諷笑諧謔〔40〕、遊戯の謡〔17〕、雑謡〔37〕、童女謡〔15〕、子守唄〔６〕となっている。計171首のうち諷笑諧謔が40首と比重が高いのは、白秋が指摘した「辛辣な皮肉と譏笑」の特徴を素雲も認めていたからであろう。素雲はその中に壬申倭乱の記憶「倭将（エヂヤングチヨン） 清正（ヂヨング）」（烏を追う歌）や「カングヘスオルネ」（李舜臣が「強彊水越來」と倭軍の来襲を知らせるよう歌わせた歌）、「鳥よ鳥よ」（東学乱）など日本との戦争記憶の童謡としての記録も敢えて加えている。その後に、「註表」として171語の朝鮮語の解説を加え、「後記」として『諺文 朝鮮口伝民謡集』からの訳出の方針と原本資料が提示され、文庫所収の経緯を説明している。

ⅱ.『民謡選』の構成と分類の特徴

こちらは、序はなく、意訳編Ⅰ〔62〕、意訳編Ⅱ〔41〕、抒情謡〔16〕、労作謡〔６〕、雑謡〔10〕、思親歌〔10〕、婦女謡〔20〕、叙事謡〔９〕の計174首が収められている。意訳編ⅠとⅡは、素雲が『朝鮮民謡集』で純粋性が高いと評価した民謡で、これが約六割を占めており、儒教の影響を受けた思親歌や、純粋労作歌から離れた民謡の評価は低い。その次に「婦女謡」が多い。『童謡選』と同じく、「注表」で85語の語句注を示し、巻末には「朝鮮口伝民謡論」と題し八章になる論説を置いている。特に、婦謡は「根強い楽天性」と「諷謔と譏笑」の本領を発揮していると評価している。「白虎がなんぼ恐しとて／舅爺さんほど恐ろしかろか、／丸木橋が怖いとて／舅婆さんほど怖かろか。」（「わが子」）など辛い嫁暮らしを、歌を手放さず歌に支えられて生きた女性たちの姿が浮かび上がる。巻末には『童謡選』『民謡選』ともに原歌採集表を置き、317名の地域と個人名と応募した歌の通し番号をつけ、原作を辿れるよう工夫している。

『民謡選』から素雲の意図が垣間見られる翻訳の一例を挙げる。

「駅奴児（えきどじ）」[63]

芹の田に　芹摘む　／愛（はし）きやし　駅奴児よ　／駅の子に　生（あ）れずば／吾（あ）が妻と　得てましを。

西江（せいこう）に　照る星／さながらに　吾（あ）が背子（せこ）よ／まことこそ　ひとすじ／抜き去らせ　根を尽（ごと）に。

注：原歌の注に新羅のはじめより慶尚道に伝わり、のちに江原道に流入セルとあり、語韻の典雅なるを愛でて古語調に試訳した。

駅奴児＝駅奴の子。駅奴は駅ごとに駐し参勤交代の官人に随う身分卑き供人。

西江＝糞尿の流れる川という。

この新羅時代から歌い継がれた雑歌の「駅奴児」を、素雲は日本の万葉風の相聞歌に翻訳している。原歌の通俗性を排し、「愛(はし)きやし」「吾(あ)が背子(せこ)よ」など『万葉集』の用語を用いてあたかも「東歌(あずまうた)」の情緒がある。現存最古の和歌集『万葉集』は渡来系とされる大伴家持の編集になる。その万葉時代からの「日本の文化を指導した先進国としての朝鮮を記憶する者」が幾人もいない日本に示そうとした意図が明白である。筆者は、この大胆な翻訳に、方言・古語を含めて日本語を徹底的に習得しようとした素雲の矜持と反骨精神、一つの抵抗の形を見ている。この「駅奴児」は素雲が主宰した課外雑誌『木馬』１号の付録「木馬月報」の一面でも「新羅古謡」として紹介された。

『諺文朝鮮口伝民謡集』の版権をもつ第一書房が、なぜ、素雲の翻訳選を岩波書店に委ねたか。素雲は『童謡選』の「後書」の最後に「訳稿を岩波書店に委ねるについて長谷川氏は欣然同意を表された。」[64] と記している。豪華製本で名を馳せた第一書房が、廉価文庫出版に力を入れるライバルの岩波書店になぜ訳稿の出版を譲ったか。筆者は長谷川と岩波の使命意識に思いを致す。二人は植民地人素雲の朝鮮の民・童謡の資料価値を認め、その翻訳を安価で読者に届けるという出版の使命に忠実であろうとした。その二人の出版人の深慮が現代にも日本の朝鮮文化理解に寄与し続けている。

おわりに

以上、素雲が 1926 年から民謡を蒐集日訳し詩誌『地上楽園』に掲載してから、『朝鮮民謡集』、『諺文 朝鮮口伝民謡集』、『朝鮮童謡選』、『朝鮮民謡選』の四冊の本として結実していく過程を追った。

素雲は十代前半からの極貧の他郷暮らしを強いられた。朝鮮からの出稼ぎ労働者から民謡を蒐集する行為は、最初は郷愁と孤独を慰めるためだったかもしれない。しかし、朝鮮人に対する日本人の差別意識や無理解そして排除にさらされて生きざるを得ない素雲は、日々憤りと不条理感を深めており、日本語の知識や言語能力を上げるため図書館や大学（もぐり聴講）に通った。また、方言の理解力は地方への無銭旅行で身につけた。このような努力を通して得た豊富な語彙による翻訳を通して、宗主国人に対し「朝鮮人をして朝鮮人たらしめよ」[65] との思いで対等な異文化理解を訴えたと考える。

また、別の動機の一つは、当時日本の朝鮮留学生の間でも注目された愛蘭の文芸復興運動であった。崔南善らから朝鮮半島が民謡の宝庫であることも学び、土田杏村からは日本の上代歌謡への影響も学び、日々遷ろう朝鮮民謡への危機感、蒐集の使命感も高まったと考える。

加えて、そこには大正時代の民衆文化に目を向ける風潮や学問、出版の在り方が必然的に反映していた。十代の素雲の詩集に「序」を書いた百田宗治、「東洋に於ける此の愛蘭土の、文芸復興の先駆」[66] として彼を迎えた白鳥省吾主宰『地上楽園』の同人たちなどは、民衆芸術派たちであった。詩人であり民謡研究家でもあり「韓(から)」の文化の色濃い肥前柳河出身の北原白秋は、『朝鮮民謡集』出版に協力し、彼に連なる詩人たち、白樺派の作家、民芸運動家、日本民俗学者折口信夫らは、その出版を歓迎した。

学術の世界でも、当時各地の帝国大学が国策の先端を担わされ、帝国化に動員されつつある時期、それに抗い「学問の自由」を守ろうとする学者たちもいた。「自由大学運動」を主導し児童文化や児童教育の重要さも説いた土田杏村はその一人であった。彼は当時の学知、通説を覆す仮説を立て帝国大学権威と闘っていた。また、土田の学位申請論文「上代の歌謡」の推薦者の一人新村出は、それが放置されるという京都帝大学知の変質の渦中で、素雲を講演者として三高に招き、土田とともに『諺文 朝鮮口伝民謡集』出版に尽力した。

出版社の中でも、権威主義・商業主義と抗いながら、新人発掘、海外作品の翻訳・移入に努めようとする出版社があった。その中で、第一書房、岩波書店も、出版警察の検閲が強化される中[67]、「出版の自由」を抑圧する国策に抵抗していた。

以上のような、謂わば「抵抗的文化圏」の日本人たちが、朝鮮文化への無理解を突き破ろうと格闘する素雲との出逢いによって覚醒させられ、突き動かされた。その結実が四冊の出版である。だが、これらの日本人の誰もが、朝鮮語の抹殺政策に疑義を挟まなかった。

素雲は、この四冊の著者の名の下に京城で「朝鮮児童教育会」を立ち上げる。これは「朝鮮の児童たちは民族性の根本を知らない没義道な普通教育によっておよそ醜怪な文化的奇形児につくられつつある。(中略) 千万の学校が彼らを救うだろうか。『桃太郎や花咲爺』が彼らに失われた心をかへしてくれるだろうか」[68] という危機感に突き動かされた活動であった。

注

1　東大比較文學会『比較文學研究』79 (2002)
2　前掲書, 37 頁
3　川本皓嗣・上垣外憲一編『一九二〇年代　東アジアの文化交流』思文閣出版 (2020)
4　任東権「歌謡学から見た韓国民謡―金素雲『朝鮮民謡選』にふれて―」、茶谷十六「民族の心を伝える―金素雲『朝鮮民謡選』『朝鮮童謡選』の世界―」、森山弘毅「金素雲 白秋と大正昭和の歌謡―近世歌謡の享受にも触れて―」『日本歌謡研究』46. (2006)
5　1957 年生、MBC のラジオ番組 [우리의 소리를 찾아서] の PD として 20 余年間各地の民謡を集め, 民謡専門の博物館を作った。著書に『韓国民謡大全』『우리의소리를 찾아서 (CD 付)』1, 2 (돌베개 2002)

6　『김소운의 한국구전민요』と『김소운의 한국구전동요』（서울 앞선책 , 1993）
7　박지영「번역 불가능성의 심연 - 식민지 시기 김소운의 전래동요 번역을 중심으로 －」『민족문학사연구』42（2010）
8　전계영「20 세기 전반기 민요집 ,『언문 조선구전민요집』(1933) 에 대한 연구 – 선행작업：매일신보 (1930) 수록 민요와의 비교 검토 -」『한국민요학』54-3（2018）
9　権保慶「金素雲と崔南善―1920 年代朝鮮の国民文学論の文脈において」『超域文化科学紀要』19（2014）
10　村上芙佐子「杏村と金素雲―『諺文 朝鮮口伝民謡集』の頃―」『土田杏村とその時代』17 号　1989．4
11　韓国で刊行された『하늘 끝에 살아도 : 自傳的 에세이』（同和出版公社 1968）と『逆旅記』（『金素雲随筆選集』所収 1978）をもとに崔博光・上垣内憲一が訳して、新潮社から 1983．5 に刊行。それを講談社学術文庫から 1989．11 に出版した。拙稿の引用は学術文庫版を使用する。
12　前掲書所収「狭間に生きる」。以下、金素雲の略歴については、前掲書『하늘 끝에 살아도 : 自傳的 에세이』と『天の涯に生くるとも』を参照した。
13　金素雲は泰文館『朝鮮民謡集』の解説で、前田林外『日本民謡全集続編』（1907）の 10 首、与謝野鉄幹『東西南北』（1896）中の 10 首、『新選朝鮮語会話』（1894）から転載した『日本民謡大全』の数首を挙げている。
14　坂本書店．1927 刊。日本初の朝鮮民謡評論集。永田龍雄、崔南善、浜口良光、井上収、浅川伯教、岡田貢、李光洙、難波専太郎、今村螺炎、李殷相、道久良、市山盛雄、清水兵三、田中初夫の論を掲載。のち「アジア学叢書」228 として大空社が 2010 年に復刻。
15　川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』講談社選書メチエ 80　1996 年 7 月
16　金素雲「朝鮮民謡に就いて」（『朝鮮民謡集』（泰文館 1929．7）255 頁
17　金素雲が 1934 年から 36 年にかけて主宰した児童雑誌は、崔が創刊した『少年』（1908 － 11）『青年』（1914 － 18）の影響があり、1942 年刊の『三韓昔がたり』の上代観も崔南善史観が色濃い。
18　金素雲『朝鮮民謡選』（岩波文庫，1933）
19　1890-1973、民衆の心情を描く“民衆派詩人”と称される。『新少年』・『露西亜評論』・『女学生』などの雑誌を編集し、『日本詩集』や『日本詩人』の編集委員も歴任した。また『日本社会詩人詩集』を共著した。（20 世紀日本人名事典）
20　1926 創刊、1938 廃刊。白鳥がイギリスの詩人で工芸家ウィリアム・モリスの長編物語詩の題名にならって命名した。素雲は 1927 年の二巻第 1・2・3・4 月号及び 6 月号に「朝鮮の農民歌謡」と題して五回にわたり本名で投稿している。
21　崔南善「朝鮮民謡の概観」によると、「馬韓に於けるそれ（共同労作：筆者注）は、今日全羅道中心の『六字박이』にその面影を認むべく」（上掲書 8 頁）との由来がある。
22　朝鮮の代表的な民謡「アリラン」。由来に関しては諸説がある。地方によって歌詞と曲調に差異があり、京畿、密陽、珍道、旌善など多様で、歌詞は時代に対する反感や怨情、恋情など、数多く即興曲に置き換えられるため確定的ではない。
23　『地上楽園』1927 年 1 月 18 頁
24　東洋拓殖会社の略称。
25　「地上楽園」1927 年 1 月号 28-29 頁
26　日本で 1900 年代から 1930 年代にかけて「大阪市と神戸市の間」を指す「阪神間」を中心とする地域において育まれた、近代的な芸術・文化・生活様式とその時代状況を指す。
27　前掲書，103 頁。「またもや」は上垣外の認識違いで、素雲の創作詩出版の企図は、① 1923 年関東大震災前の百田の序付き日本語詩集（未出版）、②その旧稿などの「時代日報」への投稿（諺文）、③ 1925 年出版費未払いで十部あまりしか手もとに残らなかった詩帖『出帆』（趙明熙序詩、安夕影装幀、羅蕙錫扉絵で五百部印刷）の順と考えられる。
28　同人の懇親会。同人樹沢龍吉の記録には 3 月 27 日、午後二時から早稲田大学前の高田牧

舎で開かれ、20 人が参加したとある。(『地上楽園』1927，5)

29　1801 年、愛蘭土は英国との連合王国の一部となった。言語面での植民地化も着実に進行し、ゲール語から英語への移行がみられた。19 世紀末、民族主義と言語、文化が結び付いて詩人 W・B・イェーツら主導によるして始まった文芸復興運動は、固有の文化遺産を再評価し伝統的な民族精神を覚醒 させることによって愛蘭土の文化的復権を目ざす運動であり、菊池寛らにより日本文壇に知られるようになった。朝鮮（植民地）―日本（宗主国)、地方－中央とのアナロジーとしても語られた。

30　前掲書。

31　定価は二円五十銭、序は北原白秋、「ユクチャペギ」の採譜に山田耕作、跋は中村恭二郎、装丁に岸田劉生、彫刻と刷りに伊上凡骨という豪華版。素雲は装丁のための韓紙を朝鮮から取り寄せた。

32　1921 年５月７日～ 11 日に神田・流逸荘で開催され、人気を得て 15 日まで延長した。

33　岸田劉生著・酒井忠康編『摘録 岸田劉生日記』大正 10 年５月８日（日）（岩波文庫，1998).

34　儒教臭のある「莨の唄」「麦打唄」「農夫歌」「思親歌」などを「本質に稍遠きもの」と指摘している。

35　嚴弼鎭『朝鮮童謠集 : 全』（京城 彰文社，1924）朝鮮最初の伝承童謡集。

36　文部省文芸委員会が全国道府県から集めた郷土の歌を 1914 年に『俚謡集』と名づけて刊行した。

37　第一書房は長谷川巳之吉（1893-1973）が 1923 年に創業し、1944 年に廃業した日本の出版社。書物の美にこだわり、造本の豪華本の刊行、新人の発掘や海外文学の紹介に努め、「第一書房文化」と称された。長谷川は“反骨の出版人”“本づくりの名人”といわれた。『諺文 朝鮮口伝民謡集』は定価５円で発売されたが、上木敏郎の調査によると売れたのは三冊で、のちに李王家が買い取ったという。

38　1891-1934　哲学者、評論家。新潟県生れ。本名は茂。東京高等師範学校博物学部、京都帝大哲学科に学ぶ。社会主義と理想主義の結合を目指し、社会・教育・芸術など多方面にわたる評論活動を展開した。1921 年には長野県上田の「自由大学」創設に協力、学問の地方分権化、労働と教育の結合をめざした。晩年は国文学の研究を行った。(20 世紀日本人名事典)

39　1882-1944　東京帝大文科大学言語学科卒、1926 年京城帝国大学創立と共に教授となり、1935 東京帝大教授に転じた。1926 年『郷歌及び吏読の研究』で文学博士、1933 年朝鮮総督府より朝鮮文化功労章受章。『朝鮮語史』『朝鮮語方言の研究』(全２巻）などの著書多数。(20 世紀日本人名事典)

40　上木敏郎『土田杏村の自由大学運動－教育者としての生涯と業績』（誠文堂新光社，1982）

41　前掲書。

42　金素雲「朝鮮民謡の律調―アリラングの音楽的形態―」『民族芸術』12（1928）

43　上木敏郎『土田杏村とその時代』第 16 号．1972 年４月　新穂村教育委員会合冊本，573-579.

44　注 43 参照。

45　小倉の論文「郷歌及び吏読の研究」が掲載された「京城帝国大学法文学部紀要」を借りたいという土田杏村の手紙が重山文庫に保存されている。

46　上木敏郎「杏村先生の思い出」上掲書所収。

47　文献書院「国語国文の研究」49 号 1930．2

48　「肉体は肉体の労働で養おう―、そこには精神を関与させない。」(『天の涯に生くるとも』144 頁)

49　「明日の情緒への尺度『朝鮮口伝民謡集』の上梓に先立つて」上下２回連載．「京城日報」1931．10．９と 11 の下の回に杏村宅訪問記事がある。

50　上掲書，159 頁

51　新村宅は上京区小山、杏村宅は新町頭で距離的に近い。現在、新村宅は「重山文庫」として運営されており、杏村・妻千代子の書簡も 15 通保存されている。新村は杏村の死後、全集出版にも尽力した。
一般財団法人 新村出記念財団 ¦ (s-chozan.main.jp)（2022．10．31 最終閲覧）
52　金素雲は早くから日韓辞典の編集を人生の目標にしていたが、筆者は言語研究の大家新村出との出会いの影響があったのではないかと考えている。
53　新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか　新村出の生きた軌跡』世界思想社 2017．8
54　前掲書 52 頁
55　第一書房『セルパン』1932 年十月号「社中偶語」より。
56　『諺文 朝鮮口伝民謡集』第一書房．1933．1 「目次」の前頁。
57　注 49 参照
58　前掲の崔南善の論文。
59　『朝鮮童謡選』（赤 070-1）として 1972．6．16 改訂出版。但し、2022 年版では絶版。
60　『朝鮮民謡選』（赤 071-1）として 1972．7．17 改訂出版。
61　1881-1946　明治 41 年（1908）東京帝大哲学科選科卒。1913 年主として古本を扱う岩波書店を開業。翌 14 年夏目漱石の『こゝろ』を出版し、出版業に進出。古今東西の名著の普及を目ざした岩波文庫の刊行、世界的視野・科学的知識の提供を目的とした岩波新書の創刊等により「岩波文化」と称される出版文化を築いた。（「近代日本人の肖像」）
62　前掲書，183 頁
63　前掲書，94 頁
64　前掲書，223 頁
65　注 28 の懇親会での素雲の発言（『地上楽園』1927，５）
66　『朝鮮民謡集』泰文館．1929
67　『朝鮮民謡選』の中でもアリランの以下二か所が伏字にされている。「どうせ収れても×××××よ／ままよ　旱で××らせ。」「亀裂が入るとて　なに騒ぎやる／いらぬ×××××　気が休む。」
68　上掲の「京城日報」の記事。

Abstract

Follow the efforts of collecting Korean folk songs and the translation to Japanese
by Kim So-Un and its fruiting process

Hiroko NAKAI

So-Un Gim (1908-1981), known as a translator and an essayist, experienced a bereavement of his father during his childhood, separated from his mother, and smuggled himself to Japan at the age of twelve. In Japan he got familiar with Japanese through correspondence education, study at library and walking trips to rural areas, etc. while doing physical labor.

At that time, Koreans were unfairly treated as people from Japanese colony. He was indignant at discrimination by Japanese such as ignorance, arrogance, cunning, self-esteem and misunderstanding due to the discrimination.

In order to gain an understanding of Korean culture, In1926 Kim So-Un began to publish the Japanese translation of "Korean Peasant Songs" serially in a magazine " chijo rakuen(Paradise on Earth)" by Shiratori Shogo. Also, the Irish Literary Revival affected Japan, and there was growing awareness among Koreans to protect and preserve their own culture.

After that, when he showed the manuscripts to Kitahara Hakushu , Hakushu praised them and sponsored him.Then, the first publication " chosen minyoshu (Korean Folk Song Collection)" (Taibunkan) was born in1929.

For the next two years, he called for in the paper and collected over 2,300 oral folk songs from all Korea. He was spending his days of physical labor again, looking for a publisher that could print the songs when a letter arrived from Tsuchida Kyoson in Kyoto.

The letter asked Kim So-Un to come to Kyoto, saying "I want to hear about the Hungul manuscripts." Tsuchida made a point that the songs of the ancient times had been influenced by the Korean Peninsula, and paid attention to the achievements of Kim So-Un .

Shinmura Izuru, who lived in the neighborhood of Tsuchida Kyoson, also

came to listen to Kim So-Un with interest.

The encounter with Tsuchida and Shinmura led to the publication of " onmun chosen kuden minyoshu(Hangul Korean Folk Song Collection)" from Daiichi Shobo in1933.

Minokichi Hasegawa, the president of Daiichi Shobo, had advised Kim So-Un to write in Japanese just for the preface, Hasegawa eventually accepted the claim of Kim So-Un and published 500 volumes all in onmun (Hangul).

Kim So-Un classified the children's songs and the folk songs by type from the "Hangul Korean Folk Song Collection", added explanations and visited Iwanami Shoten to deposit the manuscript, which soon to be published in1933.

Daiichi Shobo and Iwanami Shoten were originally competitors, but there was collaboration between Minokichi Hasegawa and Shigeo Iwanami on this inclusion.

In this way, Iwanami Bunko "chosen doyosen (Korean Children's Song Selection)" and " chosen minyosen (Korean Folk Song Selection)" were born in1933, that influenced many people. Kim So-Un's efforts and dedication bore fruit of the four books.

However, there worked a deep understanding of Korean culture in the literary circle, academia and publishing business, and a will to criticize and resist imperial power of those days.